

(論文内容の要旨)

唐代に興った新しい春秋学は、『春秋』の経義をこれまでのような『春秋』三伝に依存して推尋する手段を放棄して、直接『春秋』経に就き、自己の価値判断によってその経義、つまり孔子が『春秋』に託したとされる理念を追究することを特徴とする。本研究が解經主義の春秋学と呼ぶところのものである。こうした春秋学の本質は、解釈者各人の類推によって孔子の理想を創出し、それを『春秋』に込められた孔子の理念として提示する創造的解釈である。唐宋以後の春秋学は、こうした特質を活用し、時代が要求するイデオロギーを孔子が『春秋』に託した理念であると提示してそれを儒教の教義に加え、社会に供給したのであって、本研究が解明しようとするのはその具体的な様相である。

こうした目的意識によって構成される本研究の内容は以下の通りである。

第一章「唐代における新春秋学の展開」、①第1節、啖助・趙匡・陸淳の春秋学、②第2節、呂温と春秋学、③第3節、柳宗元の春秋学 — 『非国語』を中心として —、④第4節、永貞革新と春秋学 — 唐代新春秋学の政治的展開 —、⑤第5節、韓愈と『春秋』 — 永貞革新を中心として —、⑥第6節、陸淳から北宋新春秋学へ — 唐宋新春秋学の系譜 —、⑦第7節、唐代における忠思想の展開と『忠経』 — 唐代新春秋学の周縁 —

第二章「宋代における新春秋学の展開」、⑧第1節、孫復の春秋学とその尊王思想、⑨第2節、孫覺の春秋学 — 北宋新春秋学の一断面 —、⑩第3節、蘇轍の『春秋』解釈 — 王法の秩序とその特異性 —、⑪第4節、程伊川の春秋学、⑫第5節、胡安国の春秋学、⑬第6節、朱熹と呂祖謙の立場 — 『春秋』と理学 —、⑭第7節、陳傅良の春秋学 — 南宋における新春秋学の左氏学的転向 —、⑮附論、劉敞の『春秋伝説例』について

第三章「宋代文人達の春秋学」、⑯第1節、欧陽脩の春秋学 — 人情による『春秋』解 —、⑰第2節、欧陽脩『新五代史』の春秋学、⑱第3節、蘇洵と『春秋』 — 史

書の『春秋』化 ―、⑬第4節、蘇軾の春秋学 ― 史論と『春秋』 ―、⑭第5節、王安石の經学と『春秋』、第6節、范祖禹の『唐鑑』と春秋学

第一章では唐代に啖助・趙匡・陸淳等によって創始された三伝を経ずに直接『春秋』経について自己の解釈を示す新しい春秋学の成立とその展開を示し、唐代の新春秋学が有する特異性を明らかにする。いったい、啖助等によって創められた新春秋学は、従来の三伝依存の『春秋』解釈を否定して、自己の見解によって直接『春秋』経を解釈する新しい研究スタンスを採り、以後の春秋学の先蹤をなす。ただし、『春秋』の理解については啖助（・陸淳）と趙匡とでは見解を異にし、啖助が見出した『春秋』に対する理解は、孔子は忠義溢れる社会を実現することで衰滅著しい周王朝を救済しようとし、そのために『春秋』の各種事件を忠義心の有無を視座にして検証したということである。その説は通常「忠道原情説」と呼ばれている。一方、趙匡の春秋学の方は経例の分析を中心に客観的に『春秋』中の措辞の意味を読み取ろうとするもので、以後の、多くの春秋学者の模範となる①。こうした相異なる新しい春秋学が時を同じくして啖助・趙匡の二人によって始められたのであるが、陸淳の弟子呂温はその中でも啖助及び師の陸淳の『春秋』説＝「忠道原情説」を継承して、唐代に堯舜の治績を再来させるべく、その説を唐朝の政治面に活かそうとして政治的活動に従事し②、また陸淳に学んだ柳宗元等を刺激して、柳宗元には彼の春秋学の所産として『非国語』を著わさせ、政治面では永貞革新と呼ばれる政治革新運動に従事させることとなった③。その政治革新運動は啖助や陸淳等の衣鉢を継いだ春秋学者の手によって進められ、その意味では当時の春秋学と政治が結びついた状況を示す格好の例である。その際彼等が政策の施策原理に据えたのが「大中」の説と呼ばれたものである。具体的に言えば、彼等が『春秋』を解釈する基準に用いた「中」「中庸」「中道」「中正」の概念を施策の基準に応用するもので、それは啖助の「忠道原情説」中の「忠」の部分の「中道」と読み替えるところから生まれている。これにより、徳宗の代に蓄積された政治的な不正や腐敗を是正して、堯・舜の治績を改めて唐朝の治績に再来させようとしたのがこの政治革新劇、世に言う永貞革新であった④。けれどもその試みは、当初一応の成果を見たとはいえ、後ろ

盾となった順宗の早すぎる退位によって頓挫し、改革に従事した彼等春秋学者達が貶謫の身となって地方へ左遷されることで終焉を迎えたのである③④。柳宗元等と時を同じくしてやはり啖助・趙匡・陸淳等の春秋学を修め、官僚として朝廷に務めたのが韓愈であった。韓愈は、啖助等の春秋説を革命説ではなく歴史循環説と理解して革命説を死角にし、かつ『春秋』は「謹嚴」であることを理由に、柳宗元等の政治改革運動に参加することを避けた。韓愈にとって『春秋』は孔子の理想の全てが凝縮された完璧な経書であって、一知半解なレベルでむやみに穿鑿し、それを実行に移すことは愚挙にも等しいとして、避けられたのである⑤。こうした経緯を濫觴として、陸淳以降彼等が創めた新春秋学は多くの人々によって試みられ、北宋朝に入ると陸淳らの新春秋学は士大夫たるものの持つべき教養の一つとして求められ、科挙試に出題されるまでの盛況を来すことになる。その理由の一つが趙匡の春秋学が持つ特徴であろう。趙匡の春秋学は①でも指摘したように、『春秋』の経例を搜出し、その分析を通じて正しい釈義を求める客観性を有し、それが多くの春秋学者を刺激して、彼等に自己の解釈を創出させる意欲を持たせることになったのである⑥。一方、啖助によって提唱された「忠道原情説」の方も、その後の唐代や北宋初期の社会に忠義の理念を一層重視する風潮をもたらし、それが『忠経』の誕生をもたらした⑦、欧陽脩をして『新五代史』を著わさせる遠因ともなった⑩。

第二章では宋代に入って各々の立場で試みられた新春秋学の実際を明らかにしようとする。宋代に入って陸淳等の春秋学を世に広めることになったのは、孫復である。彼の春秋学は啖助等の春秋学を継承し、その著『春秋尊王發微』は孔子の理念を尊王の意識の確立と昂揚に見出して、以後の宋朝での春秋学の基調をなす。但し、孫復が意識する王とは、周代の宣王やそれ以前の周室の基を築いた諸王に限定されるのであって、その解釈は『春秋』宣公十六年の「成周宣 火」から導かれたものである⑧。孫覺に至ると、そうした解釈は更に継承・発展され、孫復が示した解釈が宋朝春秋学の全体的傾向となった。かつ、孫覺の『春秋』解釈は極めて多角的な視野からなされて解釈の幅を増幅させ、『春秋』社会に見出されている自然観には程明道の「万物一体の仁」や程伊川の「天理」と共通する認識が示されて、時代的

な特徴が刻印されている⑨。また同時期、蘇轍もほぼ孫復・孫覺と同様な見解を示していたが、彼の『春秋』説は、『春秋』は『左氏伝』が記す史実によって始めて正確に解釈し得るとの信念があつて、そこに見出された孔子の理念が尊王の念であつたのは孫復や孫覺と同じ。けれども尊王思想を定礎する「王法」の理解に関しては、王法とは周礼のことであり、その王法の秩序は従来のような天王の絶対を視座にする立場からは翻つて、君主と臣下が共同して実現しなければならない共通の理念とされる、特異性を帯びることになった⑩。程伊川に至り、『春秋』は弟子教育カリキュラムの最終段階に位置づけられ、『春秋』はそこに盛り込まれている孔子の理念を正しく解釈することで、解釈者自身を孔子と同等の地平に到達せしめる教材とみなされることになり、解釈の優秀性が聖人孔子への到達度を示す指標として用いられることになった⑪。その意味での春秋学はまさに道学者の『春秋』解釈と呼ぶべきものであつた。南宋に入り、胡安国に継承されると、『春秋』の解釈に程伊川の「天理・人欲」説が頻繁に用いられ、『春秋』は「天理・人欲」の心の状態を伝える要典とみなされることになった。なぜ『春秋』の解釈に「天理・人欲」説が用いられるのかというと、『春秋』に記される諸事件はそのほとんどが人心に左右される人間の行為であつて、乱れた社会の矯正はその心の道德性を回復させて、その完璧を期す以外に術がないからである。かくして道学者胡安国はその道德心の涵養を孔子が『春秋』に託した理念であるとみなし、心に理を備えた人々による道義に培われた社会の実現を模索したとして、その全容を『春秋』中に明らかにしようとした⑫。南宋も中頃、理学が盛行すると、『春秋』の解釈に「理」が用いられる度合いが一層強まることとなる。その代表格が朱熹と呂祖謙である。彼等は一様に『春秋』中に理の機能を読み取ろうとし、呂祖謙に至ってはその範囲を『春秋』から『左氏伝』を経て史書へと拡大させ、歴史を通じて実践的に理を把握しようとした。これに対して朱熹は四書・五経の課程を踏み外す行為として批判するが、けれども歴史中に理を確認しようとする態度は朱熹にも認められ、彼の著作『資治通鑑綱目』はそうした実践として捉えられるべきである⑬。ところで、南宋以降は經書に対する真偽問題も喧しくなっている。そこで『春秋』についても解釈が孔子の意図として妥当

であるかいなか問われるようになり、『左氏伝』が伝える歴史が、『春秋』の解釈が正しいとする実証性を保証する書として重視され始めた。そうした意味での代表的な春秋学者が陳傅良である。彼の解釈は『春秋』と『左氏伝』が伝える事件（史実）の有無に着目し、その有無の差異を孔子の筆削として理解するもので、その解釈は元の趙 等からは、強い支持をとりつけている^⑭。また、附論として劉敞の『春秋伝説例』を挙げておいたが、これは宋代に『春秋』の経例を考えているのは劉敞以外見あたらないことから、特に取り上げ、そこに北宋代における『春秋』解釈の倫理的な傾向を見出そうとするものである^⑮。

第三章「宋代文人達の春秋学」では、春秋学が宋代の社会や文化面に及ぼした影響を文人達の著作と活動を通じて窺おうとする。いったい、北宋文人の代表格はなんといっても欧陽脩であって、「人情」に基づく彼の『春秋』解釈は、陸淳等の春秋学の継承者であることを思わせている。けれども、人情を強調する度合いは陸淳等よりも遙かに強く、それが解釈者個人の感情ないし個性と孔子の人格的な結びつきを強くさせている。そうした人情を尺度に欧陽脩は『春秋』三伝の蒙昧や虚説を検証し、三伝依存の『春秋』解釈を退け、改めて直接に『春秋』経につき、『春秋』の理念を読み取ることの正当を主張する。そして、そこに事実を直書して事の真相をそのままに伝えた孔子の筆法を見出すのである^⑯。しかもそうした欧陽脩は、事実を直書して歴史を後世に伝えることが孔子の意欲に適うことだと確信し、自らも『新五代史』を著わして五代の歴史を後世にありのままに伝えることで鑑戒を示そうとした。それは正しく孔子が『春秋』を著わした営為を自らに託すことであった。ただし、そこに託された鑑戒の理念は忠義であって、それは建国間もない北宋の社会が必要としていた忠義の理念の供給という意味合いを持つものであった^⑰。孔子の立場を借りて史書を著わし、それをさながら『春秋』のごとく後世へ提示することは、蘇洵やその子蘇軾においても容認された。その際、蘇洵も蘇軾も特に意識するのは鑑戒としての機能であり、鑑戒が史実として示されている位相に於いて、彼等二人は史論・史書との対象を異にしながら、それらに『春秋』と同等の価値を付与する者たちであった^{⑱⑲}。具体的に言えば、蘇洵においては司馬遷や班固の歴史

記述に鑑戒を仕立てる工夫が盛り込まれていることの称揚とそうしたやり方が歴史を著わす者の当為であらねばならないことの主張^⑱、また蘇軾においては自らも孔子のごとき歴史観察眼を有し、それに基づいて歴史を把握することの慫慂である。蘇軾の場合、孔子のごとき歴史観察眼と言っても、畢竟それは自己が孔子に託している価値認識に基づくことに外ならず、そこに見出される史実の判断は極めて主観的で、措辞の分析ではなく、事件が継起する史実の中に歴史の真相を求めることから各人の史論という性格を帯びやすい^⑲。ところで、宋代の春秋学の展開を考える上で見落とせないのが王安石の存在である。王安石は『春秋』を「断爛朝報」として学官から外し、經学の範囲を『詩経』『書経』『周礼』との、周の先王と関係を有する經書に限る、新学と呼ばれる独自の經学を誕生させているが、実はそのような經学観は當時の新春秋学の影響であつた。いったい、尊王の理念は當時の春秋学者が声高に提唱した儒教教義に外ならないが、王者の中でも周の先王を特に標榜したのもまた當時の春秋学者であつた。その意味からは、彼による新学の樹立は、畢竟春秋学によつてもたらされたのであるといえる（王安石自身も早くから『春秋』の解釈を著わす素志を有していたが、その王安石が『春秋』を「断爛朝報」として經書の範囲から閉め出したのは、孫覺が『春秋経解』を著わしたことで味わわされた、先を越されたとの敗北感による）^⑳。一方、『春秋』に込められた孔子の理念は後世への鑑戒の提示という解釈が一般的になると、それと前後して史書を鑑戒に仕立てる営みや、政治においては台諫職の重視ということが行われるようになった。そうした者の代表は、『唐鑑』の著者范祖禹であろう。范祖禹自身ひとかどの春秋学者であつて、その著『唐鑑』は唐代の史実を箴訓に仕立てて後世へ示すことを企図した鑑戒の書であつた。けれども范祖禹において鑑戒は『春秋』と結びついてその価値を有するよりも、国体の存亡を危惧する意識等と結びついてその鑑戒としての意義が導き出されている。こうした事態は『春秋』の有する鑑戒の機能を重視して、その作用を『春秋』と分離させ、改めてそこに鑑戒独自の価値を与えることを意味しよう。

氏 名	さい き てつ ろう 齋 木 哲 郎
-----	-----------------------

(論文審査の結果の要旨)

唐宋期の春秋学、とくに宋代の春秋学はこれまであまり研究されてこなかった分野である。それは宋代の春秋学が中国思想史の上で重要でないからではなく、単純に専門性の困難からによる。宋代思想研究の中心は理気心性の学(理学)であり、宋代思想研究者のほとんどは、経学の中でも専門性の際だって濃い春秋学に通暁していないのが現状である。一方、春秋学の専門家はほとんど全て春秋学の極盛時代たる漢代思想を専攻しており、理学を得意とする者は寡少である。かような状況下で、唐宋期の春秋学はその思想史的重要性は認識されながらも、長らく等閑に附されてきたのであるが、近年、宋代思想研究者の中からは春秋学に取り組む人たちが現れてきた。だが、漢代春秋学の研究者の唐宋期の春秋学への関心は、ただ一人の例外を除いて、なお薄いままである。その例外こそ本論文の著者齋木哲郎氏である。

大著『秦漢儒教の研究』によって漢代儒教の研究者として著名な齋木氏であるが、近年その研究主題を唐宋期の春秋学に転じ、この十数年来、唐宋春秋学に関する論考を陸続として発表してきた。本論文はそれらの論考を集成したものである。

本論文は第一章「唐代における新春秋学の展開」、第二章「宋代における新春秋学の展開」、第三章「宋代文人達の春秋学」の全三章よりなり、第一章は七節、第二章は七節と附論一篇、第三章は六節から構成されている。収録された論文の数は全部で二十一篇で、原稿用紙換算で二千枚を優に超える文字通りの大作である。内容的にも、およそ唐宋期の春秋学に関わる言説は一も漏らすまいとする意欲にあふれた力作である。しかも論者は、孫復を論ずるにあたっては先だって「孫復『春秋尊王發微』通解稿」を作成発表するというように、各論執筆の前にまずその春秋学に関する主要著作の全文訳注を作成するという手続きを踏んでおり、その訳注の分量だけでも本論文の数倍にはなるのであるから、論者の孜孜たる篤学ぶりとその筆力の旺盛さには驚嘆のほかはない。余談ながら、これらの訳注には論者の春秋学の専門家としての力量が遺憾なく発揮されているばかりでなく、そのいずれもが世界初

訳であり、その学術的価値は極めて高い。これらの訳注だけでも十分博士の学位に相当すると言えるものとなっていることを附言しておく。

本論文の価値がいま述べた論及の範囲の広汎さにあることは言うまでもなく、この分野で今後このような膨大な論文はまず容易には現れ得まいが、評者としてより高く評価したいのは、上述の周到な準備の上になされているだけあって、個々の論点が常に唐宋期の春秋学の全体的なパースペクティブのもとに展開され、有機的に系統づけられて、論文全体におのずからなる体系が生み出されていることである。

論者は本論文中において、唐代春秋学における「忠道原情説」の興起、宋代春秋学における『春秋』の史書化、あるいは唐宋両期にわたる経義の判定における「人情」と「理」という観点の導入、「大中の説」の春秋学との結合とその政治的意味、といった多くの独創的な分析の視点を提示しているが、これらの視点もこの体系化によってはじめてもたらされたものと言えよう。これらの主張にはやや強引さや性急さを覚えるところもあり、その全てに対しては同意しかねるが、唐宋期の春秋学全般を精査しての言説だけに、強い説得力を有していることは否めない。その批判は後学に課された大きな課題となるであろう。

唐宋春秋学全体への目配りは、論述のこまやかさにも現れている。本論文の期するところは、唐宋期の新春秋学が三伝の軌範を脱却して新たな『春秋』解釈の方法を模索するものであったこと、およびその目指すところは尊王思想の確立であったことを明らかにすることにある。その論点自体は春秋学史の常識の再確認に過ぎないが、そのような大きな潮流の中でもそれぞれの思想家・文人にはやはり個性の差異はあるのであり、その微妙な差異を的確にとらえ、こまやかに描出していることが、本論文をより魅力的なものとしている。

以上、述べたごとく、本論文は唐宋期の春秋学についての史上初の本格的研究であり、質量ともに、今後、容易に凌駕しがたいレベルに達している。後進の春秋学研究者にとって必ず参考にすべき古典的研究となることは疑いを容れぬところである。

もっとも、本論文にもいくつかの問題は残されている。個々の論点の是非はさて

おき、ここでは全体的な不満を三点挙げておく。

不満の第一は唐宋期の春秋学の「新」を強調することに重きを置くあまり、旧来の春秋学との関連をやや軽視している嫌いのあることである。唐宋春秋学も旧春秋学を踏襲する点はむろんあるのであって、そのことにもう少し留意すれば、本論文はさらにふくらみのあるものになったのではないかと惜しまれる。

第二は論の重複がかなり多いことである。各論を独立して読んでいる限りでは問題ないが、通読の上ではいささかのわずらわしさを覚えないではない。もともと個別に執筆された論文を集めたものであるので、若干の重複はやむを得ない点はあるが、一書にまとめるにあたっては、もう少し整理する必要があったであろう。論者は本論文の将来の出版を期しているようであるが、この点には是非留意してもらいたい。

第三は、第二の重複と関連することでもあるが、論説の仕方・方向がやや固定化されており、全体的に論述がステレオタイプ化している傾向が見られることである。ただ、これは、主題とする唐宋春秋学自体がステレオタイプに陥っているところがあるので、必ずしも全て論者の罪とは言えない。

なお、本論文には史実の誤解や文献の誤読も散見され、節によっては必ずしも僅少とは言えぬ量の誤りも見られる。しかし、それらの誤りはほとんど修正可能であって論旨に重大な影響を及ぼすものではなく、瑕瑾ではあることは免れないものの、本論文の価値そのものを損なうには至っていない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2009年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連することがらについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。